



Profile — 池田 央

1956年、東京大学教育学部教育心理学科卒業。東京大学大学院修士・博士課程を経て、1965年、米国イリノイ大学大学院修了（Ph.D.）。立教大学社会学部専任講師、助教授、教授を歴任し、1998年に定年退職。専門は計量心理学、教育測定学。著書は『行動科学の方法』（単著、東京大学出版会）ほか多数。

今にして思えば、私の米国留学は真に幸運に満ちていたものでした。1958年に大学院修士課程を終え、アメリカで盛んな計量心理学に興味を覚えて、それを専攻しようとして博士課程に進んだ頃でした。もと米国統計学会の初女性会長であったH.M.ウォーカー先生が国際基督教大学（ICU）と東大にフルブライト交換教授として来日されました。ICUで非常勤助手をしていた私はそのお手伝いをすむにつれ、アメリカで勉強したい気持ちはますます高まりました。

その頃、東大からは先輩に当たる東洋氏をはじめ、芝祐順氏、古畑和孝氏などがフルブライト留学生としてイリノイ大学に留学されておりました。当時、イリノイ大学には計量心理学関係で第一級の心理学者が多く集まっており、私も是非そこに行きたいと思いました。

1961年、運良くフルブライトの試験にも合格し、東先生の推薦もあって、教育測定の第一人者であるL.J.クロンバック教授のもとで指導を受けることになりました。

私の人生を方向づけた米国留学

立教大学 名誉教授

池田 央（いけだ ひろし）

翌年度は奨学金を延長するより研究助手として働きながら博士課程の勉強をしたほうがためになるという勧めもあってそうすることにしました。ちょうどG.C.グレーザー教授と「一般化可能性理論（GT）」の研究が進められているときで、研究室には欧州でGTの第一人者となったスイスのJ.カーディナー先生やスウェーデンからはK.G.ヨレスコグも教えたというS.ヘンリソン先生も一緒でした。私の仕事はクロンバック先生が「これ読んでみて」と指定された学会誌の論文に目を通し、その内容を要約して報告することでした。これは先生がさらに熟読して研究を深めるに値するものか判断するためだったようですが、私の勉強にもなることでした。

電子計算機ILLIACを開発したことでも有名なイリノイ大学は、その分野でも先端的な研究が進められ、その頃盛んに使われた因子分析のメッカでもありました。バリマックス回転のH.F.カイザー、3相因子分析などのL.R.タッカー、SD法のC.E.オスグッド、16性格因子質問票で有名なR.B.キャッテルなどが居り、外からはノースカロライナ大学からL.V.ジョンズやR.D.ボックなどが来て授業しました。これからは計算機の時代に間違いないとプログラムを勉強し始めたのもこの頃でした。

2年目の夏、クロンバック先生から、ETSで博士課程の大学院生を1名ずつ研修生として募集してきているので推薦するから行ってみないかといわれ、またと

ない機会だとプリンストンまで行くことにしました。妻と二人で僅かな家財道具と書物一切を車に積み込み、東部目指して運転していききました。そこには後にミシガン州立大学教授となるR.L.イーベル先生が待っており、全米12大学から選ばれた大学院生のよき指導者兼世話役として皆から慕われました。統計ではS.S.ウィルクス、テスト理論のH.ガリクセン、F.M.ロード、S.メシク、W.H.アンゴフなど錚々たる方々がいて直接講義が受けられました。家の近くに住んでいたW.E.コフマン（のちにアイオワ大学教授）とは、ガソリン代節約のため一日交代で各自の車に分乗しあいETSに通ったものでした。

まだヴェトナム戦争が激しくなる前の当時、フルブライト奨学金制度には世界の留学生に豊かなアメリカを広く知ってもらおうと贅沢なプログラムが用意されていました。それを利用してワシントン、ニューヨーク、ボストン、さらに、カナダ、ミシガン、ウィスコンシンなど、待ち受けたホストファミリーを訪れながらイリノイに戻りました（3年目の夏は中西部の諸州にも回りました）。厳しい博士資格試験も無事合格し、2年かけて博士論文を完成、Kappa Delta Pi 優秀賞をお土産に、就職の決まっていた立教大学へ急ぎ着任しました。1965年の夏間近のことです。こうしてアメリカで得た多くの貴重な体験はその後の私の人生を方向づける宝として、感謝の気持ちとともに、いつまでも私の心に深く残っています。